



題字・山下太郎名誉教授

静岡大学文理・人文学部同窓会

発行人 ■鈴木基之

編集人 ■岳委員会

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学共通教育A棟

Tel.054-238-5148 Fax.054-238-5148

同窓会総会案内のため、岳48号は、全員に送付しました。

〈住所訂正のお願い〉

昨今の市町村合併の影響で、転居しなくても住所表記が変わるケースが増えています。順次訂正に努めておりますが、訂正漏れがありましたら最終面の「変更データ個人票」でお知らせください。

静岡大学文理・人文同窓会事務局

終身会費納入のお願い

副会長 落合康彦

・未納の方には納入用の郵便振替用紙が同封してあります。

・納入済みの会員には、岳送付用の封筒に貼られた宛名シールの会員コード（明朝体、斜体）の最後にPマークが入っております。Pマークが入っていない会員が未納ということです。ご確認ください。例：1234S58P

〈事務局への連絡〉

月曜日から金曜日の10:00～16:00にご連絡下さい。
（休日、時間外はメール及びFAXにてご連絡下さい、後で対応いたします）

担当：土屋

目次

平成19年度静岡大学文理・人文学部同窓会総会ご案内	1
平野民法ゼミ同窓会が開かれました。	
人文3法 中村 増美	1
井上隆道先輩の一周忌・追悼会に参加して	
文理7数 深見 謙次	2
平成19年度穆察会議を開催	
文理15理 鈴木 勝巳	2
「供養とスケッチの四国八十八ヶ所寺遍路旅」	
文理9経 小林 五郎	2
大学だより	4
就職活動に王道はない—ひとつの体験記	
社会学科4年 中田佐知子	4
就職活動を終えて	
経済学科4年 武藤 京子	5
3年過ぎようとしている私の大学生活	
法学科3年 馬淵 尚美	5
学生生活について	
言語文化学科2年 齋藤 頌	5
新任教員紹介	6
書籍紹介	6

平成19年度 静岡大学文理・人文学部同窓会総会ご案内

同窓生の皆さん、お元気で日々ご活躍のことと思います。

政治も経済も大きな転換期の渦中にあり、また母校も独立法人化して厳しい舵とりが求められています。同窓会もこの状況変化に対応して大きく転換を図り、大学のパートナーとして活動することが必要になってきております。今回の総会はこの重要な時期を担う次期新役員を選出する大切な任務が課せられております。

以上のことをご理解頂き、次の日時で定例総会を開催致しますので、多数の皆様の積極的なご参加を期待しております。

記

- | | |
|------------------|--|
| 1. 日 時 | 平成20年2月10日（日）
午後1時30分より午後4時 |
| 1. 会 場 | 静岡県男女共同参画センター
「あざれあ」2階大会議室
（静岡駅西方300メートル、国1沿い） |
| 1. 議 題 | 次期新役員を選出 |
| 1. 記念行事として講演を予定。 | |

以上

平野民法ゼミ同窓会が開かれました。

人文3法 中村増美

静大文理学部・人文学部を通して卒業生を輩出した平野民法ゼミナールの同窓会が平成19年9月15日（土）、静岡市葵区のクールポール会館で開催されました。

恩師の平野克明先生は、平成9年3月をもって静大を定年退官されましたので、卒業生の一番若い方も30歳代となり、今や社会の中堅として活躍している年代となりました。片や、昭和40年代前半の卒業生は定年を迎える時期であり、親子ほどの年齢差のゼミ仲間が一同に会することとなりました。

前回の同窓会は先生の退官に合わせて開催されましたので、実に10年ぶりとなります。当日は全卒業生256名のうち約4分の1に当たる64名が参加され、平野先生ご夫妻と息子さんご家族を囲んで和やかなひとときを過ごしました。

司会は縣修さん（人文21回）と廣住友妃子さん（人文28回）が担当し、中村増美実行委員長（人文3回）の開会の辞に続いて、平野先生からご挨拶をいただきました。先生は、静岡大学を退官された後、

小田原市の関東学院大学法学部で引き続き学生の指導に当たられ、その間、再び静大人文学部の非常勤講師を2年間勤められ、民法Ⅳを担当されました。なお、当日配布された記念誌には、昭和58年ごろ先生が出された民法Ⅳの試験問題（大阪国際空港における航空機発着の差止請求）が再掲されていましたが、もはや手に負えないという思いでした。

乾杯の音頭を第1期卒業生である小澤通夫さん（文理13回）にお願いしたあと、参加者のスピーチが始まり、定年を迎えた方や現役で弁護士や大学教授として活躍されている方々から近況報告を含めたお話がありました。

後半の圧巻は、鈴木久雄さん（文理14回）による朗読で、子どもの虐待を扱った「ぼく、あいにくたよ」が始まると、それまで賑やかだった会場が静まり返り、迫力ある語り口に、皆さん身を乗り出して聞き入っていました。このあと渡邊正英さん（人文16回）が時計談義として、時計についての知られざる話を披露されました。

この時点で予定時間はすでに過ぎていましたが、ステージ上では最後の話題となった裁判員制度で大いに盛り上がり、結局予定の時間を大幅に超過し、金子和広さん（人文16回）による閉会の辞で幕を閉じました。



井上隆道先輩の 一周忌法要・追悼会に参加して

文理7数 深見謙次

東京帝国ホテル3F「富士の間」で07年6月10日（日）、旧制静岡高等学校創立85周年記念大会が、出席者四百余名で盛大に開催された。静岡大学同窓生60名も祝福に参加し、90周年も開催、という大会決議の証人となった。旧知の旧制静高先輩方と久しぶりに交わす挨拶は「井上さん、本当に残念でした……」と俣ぶばかりだった。（井上隆道氏 3仏 06年5月17日逝去 以下「先輩」）井上夫人も先輩の遺稿集（「大地」No30）の初頁に掲載された写真と同一の遺影を抱き、役員遺族関係者として出席されていた。

この記念大会が行われた一週間前、先輩がかつて主宰者であった同人誌「大地」の最終号として、遠藤栄氏（1仏）のご精魂により「追悼文集」（A5判 P.239）が刊行されていたので、関係する出席者は既におおよそ通読されていたことと思う。私も先輩が同窓会で長年、円満具足、活力あるリーダーとして活動された貢献の足跡に学ぶべく、面影に立って寄稿した。出稿者27名が俣び綴るドキュメントは、先輩の歩みの集大成である。先輩の学生時代と社会人としての時代、その両方を識る人、いずれか一方を識る人。生い立ちに関与した人。それぞれに係わった出来事や思い出を馳せた。

追悼文集上梓に溯る半月前の5月15日（火）、先輩の生家である桑名市の「照源寺」で一周忌・追悼会が催された。静大同窓生12名が参列した。（他に予定者3名が急務のため、やむを得ず欠席された。）同窓生の中で私

は他の学友と違って、先輩が社会人となってから同窓会活動を通して多くの示唆を受けた一人である。桜咲く4月初めに先立って、私は先輩の人徳が育まれたルーツを訪ね、由緒あるお寺の広大な境内の生地をカメラ手にして散策した。余人には恵まれない教化を受ける誠心な空間があった。参列した同窓生学友はみんな、謙虚で快活で見識ある、その取り巻きの中で人格が形成され、天性の誠心で人間関係を浄化する、相互助勢の道程が読経の境地に覚えた。

「仰秀寮歌碑」（静岡市城北公園 赤御影石3トン 1992年9月建立）、「花時うたふへし」（仰秀寮誌 B5判 P.507 1987年9月26日刊行）「大岩発大谷へ」（静岡大学開学50周年記念文集 B5判 P.433 1999年6月1日刊行）等。数数の大作は先輩が主幹となり、先輩の人脈と情熱あればこそカンパや原稿が結束して集まってできた、同窓会史に輝くドキュメントである。先輩は自らの名を残さず、雄大な実を遺された先駆者であった。

同窓会会員の年次増勢と価値観多様化などで同窓会意識の希薄が進展する中、近年は情報伝達的手段に大変恵まれていながら、意思疎通の活力と企画が不十分であるために、先に記述したような同窓会文化が低迷してしまっている。21世紀に相応しい理念を堅持し、スキル（IT技術など）とプロジェクト経験を兼備した「中興の祖」の出現を、ひたすら待ち侘びている。

（静岡大学悟寮会事務局長）



平成19年度穆寮会議を開催

文理15理 鈴木勝巳

平成19年11月10日、名古屋の地に於いて穆寮会議（同窓会）を開催した。昭和41年11月24日に仰秀寮会議室を会場にして第1回を開催し、以来会場を静岡、名古屋、東京、奈良、等々と変えながら2、3年の間隔をお

いて開催してきた穆寮会議は、昨年度（静岡会場）より毎年開催を目標に実施してきている。

今年度は、昭和26年入寮の先輩から昭和41年入寮の後輩諸君まで38名の参加となった。来賓として、在寮時

代皆が大変お世話になった田邊郁子さんにもご参加をいただいた。

会は、A先輩のご発声で乾杯をし、のども潤ったところで各人の挨拶・近況報告に移るのだが、放っておくと何時までも止まらないツワモノ揃いなので、冒頭に司会から「挨拶は2分以内に」という制限を付けられた。それも時間節約のために入寮年度単位で立つことに。先ず田邊さんにご挨拶を戴く。田邊さん、「私は5分戴く。静かに聞くように。」と宣言されて、皆に檄を飛ばして下さった。そして寮生の中にもツワモノは矢張りいた。それでもようやく全員の挨拶が済み、懇談に入った。久しぶりの再会で、中には卒業以来初めての参加という人もいたが、不思議なもの、すぐ打ち解けて談論風発、和気藹々の話の輪があちらにもこちらにも出来ていた。

続いて、S君による「序詞」の高唱を受けて「地のさざめごと」、「秋深みゆく」、「ゆたけき胸の」、……と仰秀寮全寮寮歌放吟が続く。会場の造りを考えてさすがにロンドは遠慮したが、スクラムを組んだ諸氏の顔はまさに若いわかい寮生の顔になっていた。寮歌放吟のトリは勿論穆寮寮歌「緑の草に居り伏して」である。

場所を宿所の喫茶室に移して二次会。飲み物やつまみを何度買い足しに行ったことか。ここも制限時間一杯の十二時に散会。それでも足りぬ多くの諸兄は個室に入って4、5人の分科会、それが夜中の2時頃まで続いたところも

少なくない。

今回の穆寮会議の特徴は、一つに、昭和24年入寮から昭和43年入寮まで一度でも穆寮に在籍したことのある全ての方を網羅すべく穆寮生名簿の充実に関心した。その結果、昨年度の名簿に80名程を追加することができたが、それは一方で、既に亡くなられた方の数を増やし、住所不明の方の数を増やすことにもなった。（名簿記載者数285名：既に亡くなられた方27名、住所判明者数205名、住所不明者数53名）

二つ目に、同じ穆寮生とは言え、昭和24年入寮から昭和43年入寮まで20年の幅を持つ穆寮の歴史を共有すべく、お宝写真や資料等の提供を受けて写真集「緑の草に居り伏して」（A4・33ページ）と「穆寮年誌」（第1部ひとこと集…A4・11ページ、第2部資料集…A4・19ページ）を作成し、穆寮生名簿とともに当日参加の諸氏にお渡ししたことである。手前味噌ではあるが、出席者には好評であったと思っている。

三つ目の特徴として、前述の穆寮生名簿、写真集、穆寮年誌（第1部、第2部）、等をまとめて「CD-R版穆寮年誌」を作成したことである。これも出席者と希望者にお送りすることになっている。

今回の穆寮会議は来年東京でということ、穆寮旗は東京幹事代表M氏に手渡された。



（穆寮旗を背にしての参加者全員による記念撮影）

「供養とスケッチの 四国八十八ヶ所寺遍路旅」

文理9経 小林五郎

9月24日

朝から晴れてすがすがしい朝の光が山寺の杉の梢を赤く染めている。昨夕あえぎながら上ってきた坂道も一気に下り岬をぐるりとまわると、洋々とした黒潮の大海原に出た。昨日の荒々しい岩や大波は姿を消し、どこか女性的な、静岡でいうと久能海岸に近い風景の道を津照寺に向けて歩く。

広い遊歩道と車道の間にある街路樹

の蘇鉄の下にはハイビスカスが植込まれていて、赤い花がところどころに咲いている。いかにも南国風情で目を楽しませてくれる。間もなく室戸市の街中に入り、漁港に面して第二十五番津照寺はあった。山門をくぐると急な石段が100段以上つづいていて、途中に一風変わった竜宮城のような鐘樓門をくぐる。右に曲ると本堂になる。この寺はその昔静岡にもなじみの深い山内

一豊が海上で暴風雨におそわれたとき、一人の僧侶が現われて舵を取り、無事難をのがれることができた。この僧侶こそは本尊であったといわれ、海上安全を守る神として地元の漁民から厚い信仰がある。

津照寺を後に次の金剛頂寺に向う。青天はありがたいが、暑さが厳しい。国道55号を右折して側道に入り、曲りくねった車道をジグザクに上る。お遍路を乗せたバスやマイカーが横を追いぬいてゆく。汗をふきふき1人黙々と歩くこと1時間、ようやく山門に着く。金剛頂寺は最御崎寺が東寺と呼ばれているのに対し西寺と呼ばれて親しまれている。

下りは車道を避け遍路道を通ることにする。

金剛頂寺のある行当岬は下から見上げると単なる山にすぎないが、頂上付近は民家が点在する部落になっていて、その中の田舎道をぬけると雑木林の茂る山道になり、竹林を通り、夏草の生い繁る畑道に出た。30分で再び国道にでてきた。これより27キロ先の神峯寺に向かって歩きはじめる。11時半を少しまわっていて、今日中に行き着くのは無理なので、今日は神峯寺の麓まで行くことにした。通りぞいの小さいスーパーでムスビ2個にパン、牛乳、ソーセージにバナナやミカンを買った。行く先には民宿がない、今日こそは野宿をしなければならないので2食分を買いこむ。重いビニール袋を下げて少し歩くと遍路道脇に小さなお宮さんがあり、こんもりした森になっていてここで昼食をすることにした。リックをおろし、素足になりほてる足を砂地におろして少々浮き浮きした気持ちで昼食をとっていると、例の大きなリックを背負った女性が通りかかった。

足元にチラチラ木もれ日が落ちて、砂地を素足で歩くと心地よく大地の冷たさが伝わってくる。鈴木さんとはこれから何回も出会いと別れをくり返すことになるのだが同じように歩いていても一度限りで会わない人があると思うと彼女のように何日も間があいてしまっても再会する人もいる。私の娘よりも年若いのに何故か、旧知の友人のような親しみを感じてこれから一緒に旅をすることになった。食事がすむと「さあ、それじゃ出かけようか、と2人して歩き出す。お遍路は原則として一人旅が基本である。それは歩くスピードが違うし、休むタイミングや体力、趣味等価値観も違うからである。歩道が狭いので並んで歩くことはできないし、交通量が多いので歩きながら会話することもできない。2人は国道を黙々と歩く。大体歩くスピードが同じくらいで、3時過ぎに室戸市から奈半利町に入る。道は依然として海に面していて、やがてドライブイン「なぎさ」にさしかかったので立ち寄ってひと休みする。国道沿いには休むところが少なく、お宮とかドライブインしかないのだが、これ等もまれで、結局歩きつづけるか、立ち止って小休止するしかない。カラカラに干いたのどにアイスクリームや缶ジュースが吸いこまれてゆく。夕方5時、めん処作兵衛でうどんを食べ夕食にする。四国はどのうどん屋も讃岐うどんがでるので大変おいしい。食べながら、さて今夜はどこで泊ろうかと相談。彼女は若いのにリック1つで全国を野宿しながら旅をしていて、その道のエキスパートだ。私は登山で野宿した経験はあるがこうした市街地での野宿は初めてで「どんなところで泊るの？」と聞くとスーパーの前とか学校、役場、神社、公園等で、トイレと水場のあるところで

シュラフや彼女のテントを広げられる位のスペースがあり、裸電球もついているのでここに泊ろうということになった。まだ明るいので急いで着替えをして洗濯して干す。夕方なので干くかどうか判らないが、その時はその時。マットを敷きシュラフを広げてみると、中々いい感じだ。暗くなってから携帯で妻に電話する。毎日朝8時半と夜の8時に電話を入れる約束で家を出てきた。体がどこまでもつか判らないので、3日か4日でギブアップするかもしれないし、1週間で帰るかもしれない、体力がもてばもう少し歩きたい。こんなあいまいな気持ちで家を発つてきたので体調を含めて連絡をする約束をしていたのだが、室戸まで来てみると、ほぼ八十八ヶ寺歩き通せるのではないかという漠然とした自信がついてきた。電話をしている横で彼女が語りかけてきたので妻は不審に思い「誰がいるの?。」と聞き返してきた。1人旅をしている鈴木さんという女性と今夜は一緒に野宿をしていることを告げるが納得できない様子で「フーン」と一言いった。私の携帯はポイントカード制で、30ポイント使用すると使えなくなる。カードは2枚しか持っていないし、途中買おうと思っても店がない。宿の予約と妻への電話で1枚目は残りわずかになってしまった。だから携帯での連絡は電光石火の如しで「元気だよ、じゃーね、室戸の最御崎寺の宿坊で泊るよ、元気だよ、こんな調子でこの時も2、3秒で終わって電源を切ってしまったので妻としてはもう少し詳しく聞きたかったのではないかと思うのだが、その余地はなく一方的にブチンと切られてしまったわけだ。鈴木さんは1人用テントに入りラジオなど聞いて楽しんでいる。私はうす暗い電球の下でしばらく地図を見て明日のスケジュールを考えていたが目が疲れてきて、蚊対策で顔まですっぽりとシュラフに入れて眠ることにした。しかし、暑苦しくて顔を出すとたちまち蚊の大群が押しかけてきた。予想はしていたが、心配した通りになった。手ではらいのけても、すぐに舞い戻ってくる。どうしたらよいのか思案の末思いついたのがタオルを顔の上にかけることだ。民宿でもらったタオルを出し、なるべく鼻の上に空間ができるようにかけてみた。多少息苦しいが何とか呼吸はできる。果せるかな蚊達は前にも増して攻撃してきたのだが、顔の上のタオルにとりついてブンブンするだけで、タオルの厚さに邪魔されて吸い口が顔にとどかない。「蚊め、どうだ、参ったか!。」とところで四国にいる蚊は静岡にいる蚊に比べると倍位大きくて、これにやられると大きく腫れてしまう。が幸にもすう体が大ききだけ動きもノロマで、防ぐ工夫さえすれば刺されることはないことが判った。

10月6日(土)

40キロの行程は一寸きつそうだが歩くしかない心を決めて歩き出す。国道56号線を宿毛市の中心街に向ってすすむ。

10月に入り、早朝の空気は肌寒い位だ。7時を過ぎた頃から急に交通量が多くなる。宿毛市内は落ち着いた地方都市の感じで、高層ビルはないが商店と住宅が混在した街並が広がっている。朝なので出勤者など多くあわただしく1日が始まろうとしている。こんな街中は遍路シールがないので、地図を頼りに交叉点等ポイントでは人に聞いて確認するしかない。何人かに聞きながら郊外の四つ角にさしかかった。さてここは直進か曲がるのか? 周りは田圃で人はいない。困っていたところに都合よく自転車に乗った中年の男の人が通りかかったので声をかけると自転車を降りて丁寧に教えてくれた。

「あの山の上にテレビの反射鏡が見えているね、あの山が松尾峠だから、あの反射鏡目指して行けばいい。この道を行くと急坂になり、あそこに白い建物が見えていますが、あの建物の裏側を通過して山道を上って下さい、あの白い建物は私の家です」このまま直進していたら確実に迷路に入りこんでいた。すんでのところで教えていただいて本当にありがとうございました。何回もお礼を述べてすすむと、言われた通り住宅地の道は急に上り坂になり、左手に曲がって道は白い建物の裏手に出た。教えてくれた人の家だ。ありがとうと心で合掌しながら先に進むとそこからは山道になった。落葉が積もったふかふかの里山の道で心地よい。あまり歩かれていないらしく足跡がない。雑木や杉、桧が混在する林を進むと間もなく下りになり、再び人家のある里に出た。同じような小さな里山の峠を三つ越えてようやく松尾峠の入口に着いた。ここで小休止。人気のない山里はとにかく静かだ。時折鋭いヒヨ鳥の叫びが静寂を引き裂く外は秋虫のか細い声が足元の草むらでしている位。目の前の柿の木には赤く熟れた実が沢山ついていて、田舎者の私にはこの柿は甘柿で、しかも富裕柿だと一目見て判った。柿の実がおひとつどうぞと呼びかけているように思えて、「いただきます、と木に挨拶をして赤くて甘そうなのを1個もぎとった。実は思った通り水々しくてとても甘くて美味しい富裕柿だった。「ご馳走さま、と山の神さんに合掌。近くの小川には、ドジョウ位の大きさで、4本の手足のあるサンショウ魚が数匹川底にへばりついている。子供の頃山に遊びに行くと谷川でつかまえたあの魚だ、何十年ぶりの対面で懐かしく思う。

松尾峠は標高300mの低い山なので30分足らずで尾根に着く、見晴らし台があり、汗まみれのシャツを脱いで日に干し、ランニング姿で下方の宿毛



「やあ!」「又お会いしましたね」こんな短い挨拶を交わし「一緒にどうぞ」とさそうとすっと入ってきて「ご一緒しようかな」とドッカと大きなリックを下ろした。このお宮さんの前には丁度スーパーがあって彼女はそこで食べ物を仕入れてきた。彼女は鈴木さんといった。国道から少し入っただけなのに、祀の前は静かな空間になってい

ければ軒下が使えるところが良いらしい。「ま、どこでもいいや、私も気にしない方だから、と安田町役場を目標して歩き出す。

5時過ぎれば職員もいなくなるので玄関あたりにしようかと近くまで行くとまだ電気がついていて無理のようだ。すぐ隣接して広々した神社があり、下調べすると本殿の前の屋根下に

の港町を眺めていると、突然、長髪にヒゲ面の若者がコーヒーカップを片手に飲みながらヌーと現われた。

何だこりゃ！この人は何者？ ペットボトルなら判るがコーヒーカップはなぜ？この山中で。「今日は…」半信半疑で挨拶すると、若者は一緒にベンチに座って問わず語りにしゃべりだす。「ここで大師堂を建てているんです」「え？ 大師堂？ どこですか」「すぐそこ」

実際、このベンチから10mと離れていないところに小さな大師堂が建築中で、林にかくれて見えなかったのだ。

彼は徳島市出身で、お遍路でここに立ち寄った時、大師堂を建てたいが人手が足りなくて困っていると聞き、旅を終えてから再び訪れ、以降ボランティアで参加しているのだという。大工のダの字も知らないが、テント暮らしをしながら半年間寝泊りしてここで毎日手伝っている由。最初は本職の大工さんがいたが、今は2人で作業していて、2人共素人だという。今日は屋根の銅葺き作業の予定になっていて荷が来るのを待っているとのことだった。多少私も木を刻んだり日曜大工の経験もあるので、こんなところでお手伝いしてみたいという欲望が頭をもち上げたがそうもしてられない。大師堂は

は忘れられない思い出に結びついている。

中学3年生の秋だった。母が病の中突然他界したのだ。私が1才の時、父は胃ガンで亡くなった。母は女手1つで、乳のみ子の私を末に8人の子供達をかかえて生きてきてくれた。母には胆石病の持病があり、年に1～2回発作をくり返していたが、いつも1週間位床につくと快くなり、元通りの日常生活を送っていたから、この時もいつもの通り元気になるんだと何の疑念も持っていなかった。が、死は突然やってきた。当時は火葬せず、木桶に納めてお墓に土葬した。墓穴に桶をおろし、まず遺族がパラパラと土を手でかけた。土盛りされた上に墓標を立て、そこに大好きだったカルピスをトクトクとかけてやった。母との永遠の別れだった。数日間悲しくて淋しい日々を送り、初めて登校した時に校庭で迎えてくれたのがこのコスモスの花なのである。秋に咲くコスモスは、その可憐な、淡い色の美しさ故に、心に深くしみこんで、生涯忘れえぬ花になった。今こうして母や父の冥福を祈りながら、末子の私が還暦を過ぎて四国の地を遍路している。`オレはかやん（母）やとやん（父）の分まで永生きするからね、こんなことを思いつつ、当時を思い出す

道は右に迂回しながら上り坂になっていてその上は高台になっていた。しかも満倉という地名の部落で先刻の岩清水の真上には一軒の民家が鎮座していたのでした！ 下からは岩や木の繁みで見えないのだが、でも既に胃袋の中に納まってしまったし、ひと口ぐらい、ま、いいか。

城辺町の街中を途中から右折するとすぐ100m位の川に出る。川岸沿いのサイクリングロードを数キロ進んだところに観自在寺への入口があった。山門は旧道からは100m程入っているが、その間には昔ながらの旅籠が何軒か並んでいる。古めかしくて江戸時代から続いている遍路宿なのだろうか。

山門で合掌して入ると左手には十二支の守り本尊である菩薩の石像が六体並んでいる。

水かけ地藏で各々に1円玉を置き、水をかけては合掌。

正面の本堂は新しく鉄筋コンクリート製だが入母屋造りで構えは豪壮だ。

庭の中程に池があり、何匹か緋鯉が泳いでいる。池のほとりで坊さんが小学生位の娘さんと母親に何か熱心に説明をしていた。民宿「磯屋」は、昨日の宿「しま屋」の推せんで一泊お世話になることにする。

寺前の宿の方が近いのだが、2キロ程はなれていて宇和島寄りにあるので、今日これだけ歩いておけば明日は多少短くなる。地図を見ながら訪ねてゆくがなかなか見つからない。行きつ戻りつしてようやくたどり着く。地図には国道沿いにあるのだが、実際は国道から入った旧道沿いにあった。宿の近くには港があり、昔はこの港に関係した人達が利用した宿なのかもしれない。「しま屋」さんが推せんしてくれただけに夕食には地魚の料理が沢山用意され、とりわけ鯛の吸いものは絶品だった。

大学だより

就職活動に王道はない— ひとつの体験記 社会学科4年 中田佐知子

今回、この就職活動体験記を書くことになり、就活時につけていた日記を読み返してみました。私は性格が几帳面ではないので、かなりとびとびにしかつけられてはいないのですが。すると、右往左往しながら活動している姿に当時の思いがよみがえり、懐かしい気持ちになりました。就活サイトへの登録、学内ガイダンス等をこなすうちに意識が高まっていった3年生の秋。あれからもう一年が経ったのかと、時の経過の早さに驚きます。私は地元での就職を考えていたので、春休みに入るなり帰省し、本格的に動き始めました。それまでの静岡での日々は、インターネットや企業から届いた資料などで企業研究をおこなったり、大学の就職課で履歴書を添削してもらったりキャリアカウンセラーの方と話したりということをし、帰省し次第すぐに行動ができるようにと準備をしていました。

帰省後、合同企業説明会や個々の会社説明会には可能な限り参加して行きました。交通費の節約のため、鈍行列車で何時間も揺られながら何度も移動したことも今ではいい思い出です。会場で企業の方と話すことのできる機会があるときには、積極的に質問などをするようにし、企業理解をより深めて行きました。

さらにエントリーシートの作成や面接も始まるようになると、自分がなぜその企業を志望し、そこで何をしたい

のかということを繰り返し自問自答して行きました。そうすることで、大学生活で自分がおこなってきたことの振り返りをおこなったり自分の将来像を描いたりし、自己分析をより深く、また、洗練していくことができたと思います。

内定をいただき、最終的に私が入社することを決めた企業は、就活を始めたころから志望していた企業でもあり、また、就活を通じてさまざまな企業と出会ったり自己分析をしたりしていくなかでも、ここで働きたいという思いがさらに明確になったところでした。振り返れば、その企業にはなぜこなのか、ここで何をどんなふうにしていく気なのかということが一番自信をもって伝えられました。それは、繰り返し自己分析をおこなった結果出た、私の結論でした。

就活に王道はないと思います。人によってその進め方も取り組み方も異なります。私は就活を経験してみて、大切なのは自分の納得のいく形で活動を終えられることではないかと感じました。この文章を読んでくださっている後輩のみなさん、就活を進めていき、自己分析や面接をしていくと、大学生活を思い返して自分には人に誇れるような特別な経験がない、と落ち込むこともあるかもしれませんが、でも、人はそれぞれその人にしかできない経験をしてきているのだと思います。私は特別な経験は何もしていませんが、自分



2間四方位の大きさで寄せ棟になっている。ほぼ完成して屋根工事に内装工事を少々すれば完成といったところで、すぐ横には等身大の木彫の大師像も出来上っていて、いづれ大師堂に安置されるのだろう。四国八十八ヶ寺には全て大師堂があるが、これこそが`本物、の大師堂ではないだろうか、そんな風に思えてきた。

仏教は欲や執着心を捨て純な心になることを説いている。この大師堂こそはそんな無欲な人達の汗と努力の結晶に見えた。納経し、深々と頭を下げてから峠を下りる。下りたところに、観自在寺まで14.5キロの標識がある。

民家近くに来ると金木犀の花から高貴な香りが辺り一面にこぼれ落ちて広がっている。道の両側にはコスモスの花が満開だ。

コスモスの花は美しいが、どこそこ淋しさをただよわせている花で、私に

と、旅の感傷も手伝ってか幾筋もの涙がとめどもなく頬をつたって流れ落ちた。

先程の峠の頂上で愛媛県に入っている一本松町の中心街をぬけると再び山中の道に入ってきた。リックには水を持ち歩いているのだが、きれいな谷川の水に出会うとつい手ですくって飲みたくなる。林の中を蛇行して走っている曲り角に来た時は、10m位の岩場から細い滝状になって岩清水がしたり落ちているではないか、これは飲むしかないかと近寄り両手にためて口にふくんだ瞬間背後から声がとんできた。`あ！その水生活排水だよ！、近くで道路工事をしていて休んでいた人が見ていたのだ。

え？何でこれが生活排水になるの？これって岩清水でしょ！
合点がゆかないが、`すみません、と一礼して歩き出してみて啞然とした。

なりに頑張ったことを思い返し、そこから成長できたと感じることを考えていきました。後輩のみなさんには、自分を卑下せず自分のやってきたことを信じてほしい、ということ伝えてたいです。

就活中、合間を見つけては、私はよく友だちを誘って飲みに出かけていました。そこでそれぞれの就活の話や、他愛のない話をすることでリフレッシュし、よし頑張ろうと新たな活力を

もらっていました。みなさんもほどほどに息をぬきながら就活を乗り切ってください。就活は辛いとよくいいますが、それだけではありません。自分を見つめなおすいい機会であることは間違いなし、企業のトップの方や他大学の人たち、色んな人たちと話せて楽しかったというのが私の感想です。みなさんが納得の行く形で就活を終えられることを、心からお祈りしています。

就職活動を終えて

経済学科4年 武藤京子

就職活動を終えて私が一番感じたのは、その時にできる最大限の努力をし、本気になって取り組めば、何か必ず得るものがあるということです。その頑張りは評価されることもあれば、残念ながら受け入れてもらえないこともあります。失敗は成功の元というように、私の就職活動は失敗から学ぶことがたくさんありました。

私は、3年生の1月ごろから就職活動を始めました。まだ就職活動をどのように進めていけば良いかがわからず、不安な気持ちでいっぱいでした。特に、エントリーシートを書くのには本当に苦労しました。自分はどのような性格か、どのような価値観をもっていて何をしたいのか、なぜそれをしたいのか。自分のことだから分かっていると思っていても人に伝わるように文章で自分の思いを上手く表現することは想像以上に難しいことでした。就職活動では自己分析がとても大切であると身をもって痛感しました。就職活動の中で一番時間をかけたのが自己分析です。人に伝わりやすい文章で表現できるようにしたいと思い、今まで自分のしてきたことを思い出し、その中で自分はどのように感じ、考え、行動したのかを具体的に紙に書き出しました。何度も何度も書くうちに自分の主張したいことや自分の価値観をもう一度確認することができました。そしてエントリーシートがようやく通り始めました。

選考が進み、面接もエントリーシートと同じように思っていることを伝え

ようと意気込み、初めての面接を受けました。ところが緊張してしまったのと、自分を良く見てもらいたいという思いから、本当に伝えたいことの半分も伝えることができませんでした。書くことと相手に話して伝えることの違いは大きいと感じました。鏡を見ながら面接を思い浮かべて話す練習をしたり、さまざまな就職活動の参考本を読んだりと自分なりにいろいろな工夫をしました。実際に言葉に出して表現することで自分の思っていることを頭の中で整理することができ、自分の思いに自信を持つことができました。面接では素直に、そして等身大の言葉で思いついて話せるようになり、内定をいただくことができました。

就職活動は自分との戦いだと思えます。他人と比べないことです。私はちょうどセミナーなどが集中する2月に大学のテストがあり、周りの友人がいろいろな会社のセミナーに行った話を聞いて正直焦っていました。でも自分は自分。挑戦できるチャンスをしっかりつかんでそこで全力を注げばいいと前向きに自分に言い聞かせることで、一つ一つのチャンスを大切にでき、納得がいく就職活動をすることができたと思います。就職活動は大変で、本当に悩むことが多いですが、本気で悩んだ事ほど得るものは大きいと思います。悩んだりつらくなった時は友人と励ましあったり、気分転換をしながら明るく前向きに頑張ってください。納得のいく就職活動ができることを応援しています。

3年過ぎようとしている私の大学生活

法学科3年 馬淵尚美

なにか書いてみないか。そう言われて、なぜだか急に大学生活も終わりに近づいてきたように感じました。まだ4分の3過ぎたばかりで、あと1年残されているとはいうものの、その1年も年々早まりつつある就職活動に翻弄されながらあっという間に過ぎてしまい、気がついたら残りわずか、となってしまうのではないのでしょうか。本当に大学生らしい大学生活はそろそろ終わりを迎え、もう振り返る時期が来て

いるのかもしれませんが。

私は、3年前入学した頃に、この3年間をどんな風に過ごすか、なにをしようか考えたことがあります。そのとき決めたのは「実行する」こと。興味を持ったこと、やろうと決めたことは、結果を気にしないで、まずは実際に取り組んでみることで。高校時代、たとえ気になったことがあっても、調べ計画するうちに失敗やリスクを気にしてしまい、途中であきらめたことが

たくさんありました。そのため、「自由」といわれる大学生活では後のことは気にしないで、まずは飛び込んでみようと思いました。

まず、やってみたのは1人旅でした。年末に京都へ旅行したときは、18きっぷを使い片道6時間かけて行きました。神社仏閣を自分のペースでゆくりと、時間をかけて回り、修学旅行で気づかなかった京文化の魅力に出会うことができました。1人で行くことにより自然と意識が外に向かい、見る風景、地元の方々との触れあい、全てが新鮮に感じられ、心がわくわくしたのを覚えています。最後、帰るとき、大雪により電車が止まり、途中豊橋で1泊するというハプニングもありましたが、それも含めて私にとって一番印象に残った旅行となりました。

また、以前から海外への憧れもあったので、中国へ少し変わった旅行もしてきました。慣れない国は不安もあり、したいという思いもあったため、静岡県青年団の主催する「青年の船」事業に参加してみました。これは年齢も経歴も、価値観も異なる人々と、10泊11日、事前研修を含めると2週間の共同生活をおくり、中国を旅行するものです。船や夜行列車等利用しながら、北京・上海を巡ってきました。壮大な歴史・文化を持ち、急速な発展を遂げる中国の今を肌で感じる事ができ、

学生生活について

言語文化学科2年 齋藤 頌

私は現在、言語文化学科のドイツ言語文化コースに所属しています。毎日最低でも一度はドイツ語、あるいはドイツに関する授業があるのでほぼ毎日、予習をしています。更に授業の内容を深く理解するためには、自ら関連する文献をあたってみることも必要です。それら全てをこなすのは簡単な事ではないし、思うように進まず時に挫けそうになることもあります。しかしそれらが形になり自分の中で消化されていくのを実感すると、やはりやりがいがあります。それに私はせっかく学び始めたドイツ語を簡単には投げ出たくはないのです。ドイツ語を学び始めたのは、高校生の頃にヘッセの『デミアン』に大きな感銘を受けたこと、所属していた合唱部でドイツ語での曲に触れたことがきっかけでした。その感動がまだ私の中に確かに残っていて、それが私にドイツ語をもっと学びたいと思わせてくれるのです。

私生活では、私はアパートを借りて一人暮らしをしています。家に帰るとこれまでのように家族がいて、ご飯が用意されているなどということはありせんので、当たり前ですが自分で家事をしなければなりません。時には友達と外食したり、お酒を飲んで語り合ったりもします。私は本当にいい友達に恵まれている

まだ見ぬ世界の広さを感じるとともに、日本や現在の私たちについて改めて考えるきっかけともなりました。さらに、この事業ではカウントダウンパーティーやホームステイといったイベントだけでなく、参加者間や現地の方々との話し、議論する機会がたくさんありました。これらを通して、伝えたいものを客観的に把握し、整理・表現することの大変さや、文化や経験等、共通した基盤を持たない人々へ自分の思いをどう伝えるか、コミュニケーションの難しさも感じました。他にも様々なことがありましたが、この青年の船に参加したことで、多くのことを学び、貴重な経験をすることができたと思います。また、参加者の方とは、共に過ごした時間は短かったものの、過去や価値観・夢など真剣に語り合うこともでき、強い絆を感じる、かけがえのない仲間と思えるようになりました。

私が3年間で取り組んだこと、できたことは少ないかもしれませんが、その中で多くの仲間・経験をえて、自らを成長させることができたと思います。大学生活もあと少しで終わってしましますが、3年間で得たことを生かし、今しかできないこと、今やりたいことを見つけて取り組んでいきたいと思っています。1年後、「充実した大学生活だった」といえるようになっていたい、そう思います。

と思います。一人では見ることのできない世界を沢山見ることができました。大学生活では友達に限らず、様々な人とのつながりが自分にとって大きな影響を及ぼしていると思います。

アルバイトは今はいませんが、以前は居酒屋さんでやっていた。週3~4回、深夜までかかってしまうので、次の日の授業が朝からある時は寝坊しないようにするのが大変でした。しかし働くことの大変さや、接客の術など、学ぶ事は多かったです。

大学生活においては多くのものがすぐ自分の近くにあるし、手を伸ばさずすればそれらに触れることが出来る場所だと私は思います。それは逆を言えば、自ら求めない限り何事もこちらにやってくることはないということです。自分で決め、自分で行う事。これが大学生活で私に与えられた自由であり、責任です。それは良い面ばかりではありません。時に自分を律しきる事ができず、投げ出してしまったり、目の前に広がるとりとめのない世界に、うつむいてしまう事もあります。しかし、これから先自分の足で生きていく私にとって、大学での生活はかけがえのない経験になっていると思いますし、これからもそうでありたいと思っています。

新任教員紹介

社会学科 鈴木清史

10月1日社会学科（文化人類学コース）教員として着任しました鈴木清史（すずきせいじ）です。都市在住の先住民や少数民族にまつわる文化・社会現象が関心領域で、1980年代末からオーストラリア最大の都市シドニーで調査研究を続けています。また文化人類学の歴史や理論にも関心があり、外国語、とくに英語で書かれている研究書などの紹介も行なっています。静岡大学では、理論や学説史に関わる科目を担当します。現地調査や研究

で得られた知識や情報を織り交ぜた授業の構築を考えています。それによって、学生さんたちの知的興味を刺激して、学問への関心を高めてもらえるようなきっかけづくりができれば幸いです。よろしくお祈りします。

法学科 坂本真樹

民事訴訟法の担当として10月に着任しました坂本真樹と申します。研究室の前方には駿河湾を望み、後方には富士山がそびえたつという静岡大学の自然豊かな環境のなかで教育・研究でできることに大変喜びを感じております。私は、民事訴訟法、特に「救済」をテーマに研究をしております。柔軟な救済の形成および執行はいかにあるべきかを日々検討しております。初めて着任する大学ということ様々至らない点があるかとは思いますが、学生と共に学び成長していきたく、また、同窓会の皆様にはご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。今後ともよろしくお祈りいたします。

が、学生と共に学び成長していきたく、また、同窓会の皆様にはご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。今後ともよろしくお祈りいたします。

経済学科 太田隆之

地域政策論担当の教員として、10月に着任致しました太田隆之と申します。環境経済学や財政学、地方自治論から地域における環境資源の自治的な管理を検証する研究を行っております。今後もこの研究を続けるとともに、地域の経済社会の持続的な発展とそれを実現する政策のあり方を追究したいと考えております。静岡大学に赴任して間もないですが、豊かな自然に囲まれたキャンパスで活気ある先生方と学生とともに学ぶことができることに喜び

を感じております。研究、教育ともにスタート地点に立ったばかりでございますが、今後全力を尽くしてまいります。同窓の皆様には後進の育成のためのご支援、ご協力の程、どうかよろしくお願い申し上げます。

書籍紹介

沖縄の市場〈マチグラー〉文化誌— シシマチの技法と新商品から見る沖縄の現在 小松かおり 著(ボーダーインク、07年8月刊)204頁

大学院の修士課程の学生だった1990年以降、著者は那覇の第一牧志公設市場の精肉売り場（シシマチ）の魅力に惹かれて調査を続けてきた。豚肉店だけで20店もがひしめきあう市場でなぜ商売が成り立つのかといえ、スーパーが均質性を売り物にするのとは反対の理屈、つまり、豚肉はひとつひとつ個性があるのだから、客の好みに合わせて売り分けるべきだ、という考えに基づいて、固定客をつかま

えているからだ。このような考えは、沖縄が独自に築いてきた豚肉食文化と深い関わりがある。このように、沖縄の市場から、商売と食の文化について考えたのが前半部分である。後半では、最近流行の伝統のブタ「アグー」や海ぶどう、島バナナの商品化の軌跡を追い、沖縄の食の生産現場や、沖縄の第一次産業がどこを向いているのかについて考えた。

生命環境倫理ドイツ情報センター編 『エンハンスメント—バイオテクノロジー による人間改造と倫理』 松田純監訳(小椋宗一郎と共訳)(知泉書館、07年10月刊)

「エンハンスメント(Enhancement)」とは、病気の治療を超えて、身体能力や知力の向上や、性格の矯正などを目的として医学やバイオテクノロジーを用いることを言う。遺伝子操作、向精神薬、ドーピング、美容外科、サイボーグ技術など多様な技術応用に関わる。生命倫理学のなかの新しいテーマで、現在これに対する関心が急速に高まってきている。本書はドイツ連邦文

部科学省がボンに設置している「生命諸科学における倫理のためのドイツ情報センター」(DRZE)の若手研究者たちがエンハンスメントに関する論点を簡潔にまとめた、国際的にも例のない研究。共訳者の小椋氏は人文社会科学研究所修了生、現在一橋大学大学院。2007年度日本生命倫理学会の「若手論文奨励賞」受賞。

個人情報保護

会員の大切な個人情報は、当同窓会の活動以外には一切使用致しません。第三者に開示・漏洩することは一切ありませんのでご安心下さい。
尚、会員データベースからご自分の個人情報データの削除をご希望される方は、下記の『変更データ個人票』にて事務局までお申し出下さい。

会員の皆様へお願い

- 次の場合には必ず、「変更データ個人票」を同窓会事務局までお送りください。
- ・転勤、引っ越し等により、住所が変更になったとき。
 - ・自宅の電話番号が変わったとき。
 - ・結婚等により、姓が変わったとき。
 - ・勤務する会社等が変わったとき。
 - ・その他会員名簿の記載事項に変更が生じたとき。

静岡大学文理・人文学部同窓会事務局

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学共通教育A棟
TEL・FAX 054-238-5148

住所等の変更は、速やかにこの用紙に記入の上事務局へお送りください。

*は必ず記入のこと。
訂正検索の利便のため、卒業回、卒業年、専攻学科を必ず記入してください。

静岡大学文理・人文学部同窓会		全部で _____ 件		* データ作成者名	
変更データ個人票		No. _____		電 話 () - _____	
変更データ入手日		本部受取日		データ更新日	
年 月 日		年 月 日		年 月 日	
個人コード番号			連絡事項		
*文理・人文学部		回 昭和・平成		年卒業 専攻	
ふりがな		ふりがな			
*氏 名		新 氏 名			
*名簿の 氏名 住所 電話 勤め先 支部 の変更(該当するところへ○を付ける)					
新住所	〒 _____				新勤め先 会 社 名
新電話	() - _____				電 話 () - _____